

幸田成友の経済史研究とその史料

—一橋大学附属図書館所蔵幸田文庫を中心に—

高橋 菜奈子
(一橋大学附属図書館)

はじめに

幸田成友(1873-1954)は、明治・大正・昭和にわたり、日本近世経済史・日欧交渉史研究の分野で活躍した。ドイツ歴史学からの流れを受け継ぎ、実証史学の基礎を担った初期の歴史学者の一人である。

明治6(1873)年3月9日東京神田に生れ、祖父は幕末の表坊主、父は大蔵省の官員であった。明治25(1892)年、幸田は帝国大学史学科に入学し、リース(Ludwig Riess)から近代的な歴史学の研究手法を学ぶ¹⁾。明治29年(1896)7月に卒業し、同大学院進学、その後、大阪市史編纂主任、京都帝国大学講師、慶應義塾大学教授、東京商科大学(現在の一橋大学)教授を歴任した²⁾。その著書は多数にして、没後、『幸田成友著作集』全7巻別巻1巻が出版されている³⁾。

幸田成友は無類の愛書家・蔵書家としても知られ、自宅には書庫も備えているほどであった。晩年は、慶應義塾大学図書館、東京商科大学附属図書館に書籍の一部を売却している⁴⁾が、自宅からトラックで書籍を搬出する時、幸田は玄関に出て本を見送り一礼し、本に別れを告げたという⁵⁾。幸田成友没後、遺された蔵書は、嗣子成一氏により慶應義塾大学図書館に寄贈された。その数は8500冊(和装本4000冊、洋装本2000冊、洋書800冊、地図260部)である⁶⁾。慶應義塾大学所蔵の幸田文庫には、書誌学的に貴重な春日版、五山版等が多数含まれており、『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』⁷⁾にも幸田文庫から採られたものが48点含まれている。これらの善本は仏典が多い。

東京商科大学附属図書館では、生前の昭和26(1951)年から29

(1954)年にかけて、和書163点850冊(一部、幸田自身から寄贈を受けたものも含む)、洋書12点13冊を購入した。武鑑・町鑑等の実用的な参考図書類が多いこと、地方文書を綴ったものが含まれていること、原史料を幸田自身が書写したものを所蔵していることが特徴である。

本稿では、一橋大学(旧東京商科大学)附属図書館所蔵幸田文庫を中心に、幸田成友の日本近世経済史研究に関連する史料を抜き出して解題を附し、幸田の著作物との接点を探ることとする。そのことによって、この時期の経済史研究の研究手法と史料の利用の実際が明かになるものと思われる。

1 『大阪市史』⁸⁾ 編纂関連史料

『大阪市史』の編纂事業は、明治34(1901)年より42(1909)年まで行われた。幸田成友が編集主任として大阪市役所に着任したのは、明治34年5月、市史の材料となる史料が皆無なのに驚き、編輯材料の蒐集から始めることを決意する。大阪心齋橋に古書肆を構える鹿田静七氏と連盟で大阪史談会を發起して史料の買入をするとともに、鴻池家別家の永田有翠、住友銀行の室谷鐵腸等と親交を結び所蔵史料を借覧して謄写した。謄写して製本したものは五百冊余に及ぶ。幸田成友が特に心を砕いたのは、御觸と口達の編纂であった。町奉行所の原本が焼失していたため、菊屋町会所・南米屋町会所の帳面他の史料を基に編年体の資料集を編集している⁹⁾。その成果は、本文2巻・史料3巻4冊・附図1巻・索引1巻としてまとめられた。

精緻で実証的な『大阪市史』の成果は、その後の多くの自治体史編纂に影響を与えた。経済史家の土屋喬雄氏は「明治以後における日本社会経済史学の発達」の中で、『大阪市史』を特別に取りあげ、「市史として最初の代表的なもの」と評価している¹⁰⁾。幸田成友自身にとっても、帝国大学においてリースから学んだ実証史学の研究手法を確立した仕事であったといえるだろう。

以下、幸田文庫の中から大阪市史に関連する史料を紹介する。便宜上、6項目に分ち、入手時期の順に配列した。

(1) 絵図

大坂町絵圖 明和4(1767)年以降 彩色写本1枚(83×75)
(Qfq10)¹¹⁾

近世の大坂の町を詳細に描いた町絵図である。武家方・町方の色分けがなされているほか、北組・南組・天満組の印も付されている。また、元禄元年以降の新地についても、年々の色を分けて記載されているので、大坂の町の開発・発展の様子を知ることができる好史料である。明治41(1908)年4月26日に開催された、「徳川時代の大阪市制」と題する史学研究会第2回例会でも、幸田はこの史料を取上げ、解説を加えている¹²⁾。

大坂東町奉行所圖稿本 関根一郷画 単色写本4枚(24.3×21.0) 袋に「旧与力関根一郷由比義勝氏図之 大阪市史編纂係」と墨書あり(Qfq11)

大坂東町奉行所の図である。『大阪市史』編纂段階では、町奉行所の絵図は発見されていなかった。そこで、東組与力をしていた関根一郷氏に依頼して、記憶を元に書いてもらったものである¹³⁾。

(2) 一色直温本

一色山城守(直温)文書 原本11冊 亜麻色表紙 縦帳(23.3×16.5)10冊、横帳(13.7×39.6)1冊 各巻頭に幸田自筆の目次あり(Qfq14)

幸田成友は、『大阪市史』の編纂係の解散した2年後(明治44年冬)、旧大坂東町奉行所一色山城守直温在職中の書類数十点を、その子孫に当る人から譲り受けた¹⁴⁾。

大坂町奉行所は、地方・川方・寺社方に関する件、廻米、消防、警察、訴訟等の町政全般に責任を負っていた。東西に分かれ、2名が定員で1ヶ月交代の月番制をとっていたが、慶応3(1867)年7月に東西両奉行所を合わせて東町奉行所一箇所となっている¹⁵⁾。一色直温が大坂東町奉行を勤めたのは、安政5(1858)年9月から文久元(1861)年正月までであった¹⁶⁾。

本文書中で『大阪市史』で利用された史料としては「宝暦元未年より安政三辰年迄三郷并穢多村兵庫西宮塩飽島人数高帳」がある。

この史料を元にした人口表は『大阪市史』の印刷段階で差し込まれ、その後、歴史人口学者本庄栄太郎氏の『人口及人口問題』¹⁷⁾に転載されたことを幸田成友は喜んでいる¹⁸⁾。

大坂東町奉行所掛図 藤原中正画 彩色写本1軸 (54×115) (Qfq6)

大坂城京橋口の東側に位置する東町奉行所を南東側から描いた図である¹⁹⁾。『大阪市史』編集終盤の明治41(1908)年、幸田は「町奉行所の絵圖といふものが欲しいと思って探してみましたがございません。」と述べていた²⁰⁾。この絵図は、その後、明治44(1911)年冬に旧大坂東町奉行所一色山城守直温から譲り受けた中に含まれていたと考えられる。最終的に『大阪市史』の口絵として採用されたが、解説はない。これも印刷段階での挿入であった可能性が高い。

大坂東町奉行平面図 単色写本1枚 (252×208) 「一色山城守在職中以来被上候也」と墨書あり (Qfq12)

大坂東町奉行所内部の詳細な間取り図である。本史料も『大阪市史』終了後に入手した一色本の一である。

正空売買聞書、米商秘説 写本1冊 丁子色斜縞表紙 (23.0×16.3) 「一色直温旧蔵書書類ノ中」の墨書、「第九号」の朱書あり (Qfq7)

米切手に関わる用語について解説した「正空売買聞書」と、覚書類をまとめた「米商秘説」からなる史料である。のちに『日本経済史研究』に収められることになる論文「米切手」の中でも、大阪町奉行一色山城守舊蔵書類中からの史料紹介がある²¹⁾。

大坂表御用金并上金追増金等大辻書ほか 写本1冊 丁子色斜縞表紙 (27.1×19.3) 「一色本乙ノ三十、乙三十二、乙二十、乙廿四号合綴」の朱書、「一色直温旧蔵書書類ノ中大正四年春自加裝釘」の墨書あり (Qfq8)

御用金とは「領主が臨時の支出を要する時に、領内の人民から取立てる金銭」のことである。天下の台所であった大坂は江戸、京都、堺に比して、用金高が群を抜いていた。幸田は『大阪市史』執筆中から、この問題に関心を寄せ、材料を集めていた。本史料は

「天保十四年の御用金」という論文の中で「文化度天保度御用金及び嘉永六年の上金追金について有力なる史料」と紹介されたものである²²⁾。

大坂地役塚奉行御役系 写本1冊 代赭色表紙 (22.7×16.0) 「一色本」の墨書「乙二十六号」の朱書あり、元表紙は亜麻色で「寺島藤右衛門控写」の墨書あり、「有三願楼」の朱印あり (Qf9)

寺島藤右衛門は近世初期から大坂三町人の一人に挙げられた瓦屋藤右衛門 (寛永10 (1633) 年に苗字御免) である。御瓦師として京都の惣左衛門とともに、禁裏・二条城・大阪城・その他の神社仏閣など上方筋の瓦専売権を有していた。本資料は寺島藤右衛門の御用にかかわって文化14 (1817) 年頃、作成された写と考えられる。

なお、「有三願楼」の蔵書印は幸田成友の蔵書印で、世間の好人を識り尽くさんこと、世間の好書を読み尽くさんこと、世間の好山水を看尽くさんことという三つの願が込められているという²³⁾。

手鑑 一色本 写本2冊 金茶色表紙 (25.7×18.7) (Qf13)

摂津、河内、和泉、播磨などについての原史料を綴ったものである。朱書きで85項目に分ち、目次を入れた跡がある。

(3) 室谷鐵腸本

(米穀商売拘) 元禄已来古記写并濱方記録 室谷鐵腸編 幸田自筆写本1冊 金茶色表紙 (26.8×19.1) 享和3 (1803) 年播磨屋仁五郎の写本、巻末に「大正四年五月末日／暑気甚寒暖計七十八度／成友一校」の朱書あり (BQc263)

(米商売拘) 御觸書之留并濱方記録 室谷鐵腸編 幸田自筆写本9冊 金茶色表紙 (26.7×19.3) 享和元年播磨屋仁五郎の写本、第1冊の巻末に「大正四年六月三日校了」の朱書あり。各冊巻末の校正の日付は九月十二日まで (BQc265)

室谷鐵腸が同家に伝わる書類・書籍の中から堂島米市場に関する法令等を整理編修したものである。室谷家は屋号を播磨屋といい、大坂堂島米仲買をしていた。本資料は、室谷鐵腸氏所蔵本の写本である。幸田はこの資料を「米に関する貴重な史料」とし、「幾十百度か市史に引用し、又東京へ帰ってからも特に室谷氏に請い、同書

を影写して今座右に備えている位だ²⁴⁾と高く評価している。

年回録 享和3(1803)～大正4(1915)年 三願書屋主人写本1冊
蒲色表紙(26.6×19.3)「大阪市北区堂島中二丁目室谷鉄腸氏蔵本」
の墨書あり(Qfq1)

寛永元(1624)年からの干支と元号が書かれた表に備忘を記入して
いく形式の史料である。序文は享和3(1803)年だが、大正2
(1913)年までの記録が書き足されている。

(4) 草間直方本

鴻池新田開発事略 幸田自筆写本1冊 金茶色表紙(26.8×19.3)
巻末に「鴻池新田開発事略三冊／草間直方稿本／裔孫繁蔵氏蔵本／
大正七年二月借抄同五月十日校了」の墨書あり(Id504)

鴻池新田は、大坂の富商鴻池善右衛門・善次郎によって開発され
た町人請負新田である。著者の草間直方は、幼少より鴻池家に仕
え、新田会所に勤めていた。後に鴻池家の別家草間家に婿入りし、
通称を鴻池屋伊助と称する²⁵⁾。本資料は、鴻池新田開発研究の基
礎史料となるものである。幸田成友は、『大阪市史』編纂後もこの
史料を必要とし、大正7(1918)年2月に草間直方の孫繁蔵氏から
借用して、書写している。

三貨圖彙 42巻首1巻 草間直方著 写本5冊 表紙(26.5×19.1)
文化12(1815)年刊本の写本(Ff121)

日本における貨幣の鑄造や通用に関する説明と、貨幣の正確な図
を掲げた書物。刊本は文化12(1815)年に成立した。4部全32巻で
ある。この史料の一部が引用されている「米切手」に関する論文は
『日本経済史研究』の巻頭を飾ることになる。

(5) 米屋本

米屋本文書 原本16冊 亜麻色表紙「甲」14冊内横半帳(9.5×16.9)
2冊、縦帳(24.6×16.9)9冊、横帳(12.4×34.0)3冊、「乙」
横帳2冊各巻頭に幸田自筆の目次あり(BQq62)

表紙に「米屋本」と墨書された原史料の綴である。米屋家は、鴻
池家と並んで大坂屈指の富商であり、本家は内平野町の平右衛門で

あるが、分家・別家もまた多かった。一族は両替商、蔵元など、幅広い経営を行っている²⁶⁾。史料は「甲」と「乙」に分けて綴られており、内容は「甲」は油問屋米屋又兵衛関係の史料である。「乙」はその他の諸事留書類8冊である。一橋大学附属図書館で所蔵しているのは、「甲」十四冊と「乙」のうち「三」と「四」のみである。油は、江戸時代には米について多く消費され、物価の標準となった商品であった。幸田成友は、著書『江戸と大阪』でも「油」という一節を設けて、「出油屋傳書」など、米屋本文書の史料を基にした研究を発表している。油に着目し、本格的な研究を行ったのは幸田が最初であった²⁷⁾。

(6) 濱和助本

大坂諸所数 写本1冊 紺青色表紙(23.8×16.7)「濱和助」印記および濱和助の整理番号ラベルあり(Qfq40)

元禄元年大坂覺書 写本1冊 縹色菊模様表紙(20.9×13.4)内題は「元禄元年御改御城代御支配所萬覺」、「濱和助所蔵」「源正眞璽」の印記あり、濱和助の整理番号ラベルあり(Qfq41)

「濱和助」印と、整理番号ラベルがあり、濱氏旧蔵書であることがわかる。濱和助氏は、大坂在住の愛書家で、幸田成友とは読書探古の樂を解する同志であった。大阪市史の史料収集にも一役買っていた鹿田静七の古書店で『書籍目録』がでる度に、互いに先を争って書物を買って求めていたという²⁸⁾。

一橋大学所蔵の幸田文庫には、他に『京都覺書』(写本1冊)にも濱和助の整理ラベルが見られる²⁹⁾。どのような経緯でこれらの濱氏旧蔵書が幸田の元へ移ったのかについては、未だ確認し得ていない。

手鑑 写本1冊 丁子色斜縞表紙(26.9×18.8)「濱本」の鉛筆書あり(Qfq39)

「大坂三郷町数家数役数之歩」ほか原史料を綴ったものである。総裏打ちされている。

2 『日本経済史研究』³⁰⁾ 関連史料

幸田成友が日本近世経済史の研究成果として上梓した著書に『日本経済史研究』がある。この書が代表的な著作とされ、服部一馬氏によると「旧幕府引継書類による江戸時代商業の諸側面に関する精密な個別研究」と評されている³¹⁾。

その目次を示すと、米切手、札差、札差雑考、質屋、富札、髪結床、天保改革の一節、株仲間の解放、御買米及び御用金、天保十四年の御用金、武士と町人、天保人別改令、非人寄場、弾左衛門の生涯、江戸の名主、徳川時代の大阪市制、日本経済史上の大阪の十八章立てである。このうち、「米切手」「御買米及び御用金」「徳川時代の大阪市制」「日本経済史上の大阪」は主に『大阪市史』の成果を生かした論文であった。本節では、それ以外の章の基礎となった史料で、現在一橋大学所蔵幸田文庫に含まれているものを中心に紹介する。

(1) 旧幕府引継文書

『日本経済史研究』の多くの部分は旧幕府引継書に拠るところが大きい。旧幕府引継書類は、江戸幕府各役所の記録類のうち、東京府に引き継がれ、後に上野帝国図書館（現国立国会図書館）に移管された書類の総称である。多くの書類が散逸あるいは焼失する中で、町奉行所関係の史料がよく残っている史料群である³²⁾。幸田成友は寸暇を惜しんで上野に通い、毛筆で「旧幕引継本」の多くを書き写した³³⁾。『日本経済史研究』の序文で、「市史編纂時代からの熟知の間柄であった帝国図書館員故吉原開氏の厚意により、この貴重書の通讀と謄写とに多大の便宜を得、無謀ともいへる計画を多少成就したのは、永久に自分の記憶を脱せぬ快事である」と書いている。一橋大学附属図書館には、それらの旧幕府引継書類等の写本が数多く残されている。

諸問屋再興調目録 幸田自筆写本 8冊 金茶色表紙 (26.8×19.2)

1、14、15、16、17巻「八品商売人之部」「髪結之部」のみ、目録1冊、其外細目1冊共 (BQc264)

嘉永4 (1851) 年3月に諸問屋組合を再興するに際して町奉行管

下の諸問屋再興掛が調査した関係書類である。本資料は昭和31(1956)年になって『大日本近世史料』の一部として翻刻されている³⁴⁾が、幸田が活躍した時代は、未だ、原史料を閲覧・筆写せざるを得なかった。幸田は「質屋」「髪結」の項でこの史料を引用している。

市中取締類集 幸田自筆写本67冊 金茶色表紙(23.9×17.2) 63冊細目(亜麻色表紙(25.3×17.8)) 4冊共、朱筆で校正した跡あり(Me153)

市中取締類集は、天保の改革に際して、町奉行管下に設置された市中取締掛が集めた町触・伺書・届書などの文書を分類整理したものである。天保改革以降も幕末まで編纂が続けられ、『市中取締類集』『市中取締類集追加』『市中取締続類集』の3編に分かれている³⁵⁾。

「天保の改革の一節」では市中取締之部が、「株仲間の解散」では町触申渡之部が、「天保十四年の御用金」では遠國伺之部が、「天保人別改令」では旧里帰農之部が、「江戸の名主」では名主取締之部が基礎になっている。本資料も『大日本近世史料』で翻刻された³⁶⁾。

市中取締書留 幸田自筆写本10冊 亜麻色表紙(24.7×17.7) 8冊細目(金茶色表紙(24.0×17.2)) 2冊共(Me157)

編年で編集された史料である。幸田は目録を非常に重視していた。本資料も、目次を抜き書きした細目を作り、朱筆で『市中取締類集』や『撰要類集』などの史料との対照も注記している。例えば、『天保撰要類集』中の「天保十四年大坂表外三ヶ所御用金の儀に付一件」は、本資料の十八と『市中取締類集』遠國伺之部にも同じ記載があることが、「天保十四年の御用金」で取り上げられた。

諸色調類集 幸田自筆写本5冊 金茶色表紙(24.0×17.2) 朱筆で校正した跡あり(Me156)

天保の改革当時の町奉行所関係書類を集めたもの。「株仲間の解放」でも「町奉行所で編纂した『市中取締類集』追加共九十一冊、『諸色調類集』三十一冊、先ず之だけを通讀するには少なからざる時日を要し、その他の史料を涉獵つくさうとするなら、恐らくは

一生かかっても足るまいと思ひます」と取り上げられ、『市中取締類集』とともに天保改革の基礎資料と評価されている。

撰要類集 幸田自筆写本45冊 亜麻色表紙 (28.5×18.9) 1冊、亜麻色 (16.4×22.0) 9冊、金茶色表紙 (19.7×13.4) 9冊、金茶色表紙 (22.1×16.6) 23冊 (Me154)

町奉行管下に設置された撰要方が、幕府の法令・先例を分類編集した史料である。大岡忠助のときに始まる。その後、増補改定し『享保撰要類集』から『安政撰要類集』まで、年号を冠した『撰要類集』が作成された。

「札差」に『享保撰要類集』が使われたほか、「天保十四年の御用金」は、『天保撰要類集』第十七に「天保十四年大坂表外三ヶ所御用金の儀に付一件」という新資料を発掘したことから、まとめられた。

(天保度御改正) 諸事留 多田内友直編 幸田自筆写本3冊 金茶色表紙 (24.0×17.1) 朱筆で校正した跡があり、巻末に「大正十年十月六日校了」の朱書あり、校正の日付は十一月七日まで (Me155)

天保の改革当時の町触集は版本写本色々あるが、一番完本に近いと幸田は評価している³⁷⁾。多田内友直は日本橋坂本町の名主である。「質屋」「江戸の名主」で利用された。

物價書上 幸田自筆写本2冊 金茶色表紙 (23.8×17.2) 第1丁に「銭相場町触以後物價引下り候旨書上／諸色掛」とあり (Me158)

天保の改革で、株仲間を解散した幕府は、江戸の名主四十一名を諸色掛に任命し、物価引下げを命じた。このとき、品々の値段を調査・報告させたものである。「株仲間の解放」で紹介された。

記事條例 幸田自筆写本1冊 金茶色表紙 (26.9×19.3) 朱筆で校正した跡あり (Me159)

記事條例の原本は全部で八十冊ある³⁸⁾が、本資料は「穢多非人諸訴之部」のみの抜書きである。『日本経済史研究』には取り上げられていない。

町年寄并名主諸願申渡御褒美 幸田自筆写本1冊 金茶色表紙 (24.0×17.0) 第1丁に「従文政十二丑年至嘉永三戌年／北町年寄方」と

あり、年号を考証し、朱筆で確定している。(Me160)

文政12 (1815) 年から嘉永3 (1850) 年までの町年寄・名主の願書を綴ったものである。これも「江戸の名主」で引用されている。

享保宝暦天明集成目録 幸田自筆写本1冊 金茶色表紙 (26.9×19.3) (Me161)

享保宝暦天明集成細目(米穀の部) 幸田自筆写本1冊 金茶色表紙 (24.0×17.3) 享保令典永鑑の目次「享保集成(御触書)三十四全ク相同ジ」という朱書あり。宝暦・天明・天保も同様 (Me162)

上野帝国図書館(現国立国会図書館)の所蔵する旧幕府引継書から『享保令典永鑑』『宝暦令典永鑑』『天明令典永鑑』『天保令典永鑑』の米穀部の目録を書き抜いたものである。それぞれに『御觸書集成』と「全ク相同ジ」であることが朱書されている。幸田は高柳眞三氏・石井良助氏の手による『御觸書寛保集成』が公刊されたとき、厳しい書評をした³⁹⁾が、石井良助氏との論争の中で、『令典永鑑』の存在と『御觸書集成』との関係が論点の一つとなった。幸田は「自分が集成と令典永鑑とを異名同物と主張するのは、實地に對讀した上での主張です」と論述している⁴⁰⁾。

(2) 札差事略

『日本経済史研究』の中で、大阪経済の研究、旧幕府引継書研究と並んで、もう一つのテーマとなっているのが札差の研究である。札差は江戸時代に旗本・御家人の代理として、その俸禄米を幕府の米蔵から受け取って委託販売するとともに、それら俸禄米を担保に金融を営んだ商人仲間のことである。この札差研究を日本経済史の大テーマに据えたのが幸田成友であった⁴¹⁾。基礎史料となった『札差事略』は、享保9 (1724) 年の札差仲間の成立以来約90年にわたる札差仲間に関する膨大な史料類を、文化13・14 (1806・1807) 年に扇谷定継が編纂したものである。38冊の編纂物であるが、大正4 (1915) 年『三田学会雑誌』に発表された論文では「十二冊は、法科大学の法制史研究室にあるが、その他は発見しませぬ。(中略) 必ず何所かにあるだろうと、精々搜索中です。」⁴²⁾と書いていた。それが、東京商科大学附属図書館に寄贈されていたことを、三浦新七東京商科大学学長から知ら

され、大正11（1922）年に着任すると、早速図書館で閲覧している。「本書を手にした刹那、自分はいひ知れぬ悦びが身軀中にみなぎったやうに感じた」⁴³⁾という。幸田はこの史料を利用して『札差事略』の成立と編者について考証し、『札差事略』とともに寄贈された関連史料についても詳細な解題を付した論文を『商学研究』第8巻2号に発表している⁴⁴⁾。

現在一橋大学附属図書館で所蔵している『札差事略』は、旧札差和泉屋源兵衛家に伝存した札差会所備付本を伊藤賢氏から、また、和泉屋清七家に伝存した一番組備付本を出口清七氏から、それぞれ大正4（1915）年6月に寄贈されたものである。昭和40（1965）年には札差事略刊行会から『札差事略』全三巻として翻刻出版された⁴⁵⁾。刊行会の中心人物は増田四郎氏であり、東京商科大学における幸田の弟子である。

おわりに

幸田成友の研究と一橋大学所蔵幸田文庫の史料の接点を求めながら、史料を紹介してきた。新田開発・株仲間・名主・札差など、現在では歴史教科書にも登場する当たり前のように見える用語も、幸田によって、基礎史料が発掘され、事実が確定されてきたことがわかる。

幸田成友の研究は「実証的」という言葉で形容されることが多い。日本の歴史学界に実証主義的な手法を持ちこんだのは帝国大学のリースであった⁴⁶⁾。リースが来日したのは明治20（1887）年、幸田は初期の弟子であり、その指導を最もよく受け継いだと評されている⁴⁷⁾。幸田文庫に見られる幸田自筆の写本類は、このことを如実に著わしている。今でこそ翻刻されている資料も、当時は研究者が筆写することによって、利用が可能となっていたことが幸田文庫の史料からわかるであろう。

そもそも、当時は、経済史という学問領域の確立期にあたる。経済史とは如何なるものなるべきかを問題提起していた内田銀蔵氏は、帝国大学時代の幸田と同級であった。内田氏は「管見に拠れば、本邦近世経済発達史の研究は、今日先づ第一に切要なり。この研究には、学

者最も多く力を注ぐことを要すべし。而して日本近世経済史材料の蒐集は、蓋し最も急務なりと云わざるを得ざるなり。」「経済史上の材料は、他の政治外交等の材料に比すれば、故さらに意を用いて完全に保存せらるること少なく、従来人々の之に注意する程度薄くして、動もすれば速やかに散佚に帰し易しとす。』⁴⁸⁾と、日本近世を対象とした経済史の必要性と、経済史関係史料の散逸の危険性を説いている。内田の論と幸田の研究には相通じるものがある。二人の親交は、在学中のみならず、生涯続いており⁴⁹⁾、互いに学問的な影響を与えていたことも想像に難くない。当時、若い学問領域であった日本近世経済史研究では、どのような事象に着目するか、どのような史料を発掘するかということ自体が重要であったといえるだろう。その中で、幸田は、江戸と大坂の市井の人々の暮らしに光を当てたのであった。佐々木潤之介氏は、幸田のそのような仕事を「物事にたいする、個別的なものにたいする、尽きない愛情がある。その愛惜の情が、研究対象を江戸時代にとったことによって、みごとに発露されたのが、幸田史学であった」と、高く評価している⁵⁰⁾。

実証的手法により、江戸と大阪の経済関係史料を発掘・収集し、数々の基礎事実を確定していった幸田成友は、その後の経済史研究・歴史学研究の基礎を築いたと評価できるであろう。

- 1) 幸田成友『凡人の半生』共立書房、1948年（『幸田成友著作集』7に再録）
- 2) 『幸田成友著作目録』『幸田成友著作集』別巻 1974年
- 3) 『幸田成友著作集』中央公論社、1971～1974年。以下本稿では『著作集』と表記する。
- 4) 幸田が生前に慶応義塾大学へ書籍を譲った経緯については、阿部隆一「学者の真骨頂」（『幸田成友著作集月報』7 1972年）に詳しい。
- 5) 吉田小五郎「幸田先生のこと」『芸林間歩』1-1 1954年
- 6) 『慶應義塾図書館史』慶應義塾大学三田情報センター、1972年
- 7) 『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』慶應義塾図書館、1958年
- 8) 大阪市参事会編『大阪市史』8冊 大阪市参事会、1911～1915年
- 9) 宮本又次「平沼博士と幸田博士の『大阪市史』編纂」（早稲田大学経済史学会編『平沼淑郎博士生誕百年記念誌』所収 早稲田大学第一・第二商学部、1964年）、幸田成

- 友「大阪市史の編纂について」(『幸田成友著作集』7所収)
- 10) 土屋喬雄「明治以後における日本社会経済史学の発達」(『日本社会経済史の諸問題』所収 南郊社、1937年)
 - 11) 後の利用者の便宜を勘案し、()内には一橋大学附属図書館の請求記号を記した。
 - 12) 幸田成友「徳川時代の大阪市制」『史学研究会講演集』1 1909年(『著作集』1に再録)
 - 13) 前掲注12) 論文
 - 14) 幸田成友「江戸の町人人口」『統計学雑誌』627 1938年(『著作集』2に再録)
 - 15) 前掲注12) 論文
 - 16) 『大阪市史』第2巻「城代町奉行表(其八)」1006~1007頁
 - 17) 本庄栄治郎著『人口及人口問題』日本評論社、1930年
 - 18) 前掲注14) 論文
 - 19) 『大坂再生』大阪城天守閣特別事業委員会、2002年 99頁
 - 20) 前掲注12) 論文
 - 21) 幸田成友「米切手」『三田学会雑誌』12-1・2・3 1918年(『日本経済史研究』大岡山書店 1928年、『著作集』1に再録)
 - 22) 幸田成友「天保十四年の御用金」『商学研究』5-2 1925年(『日本経済史研究』大岡山書店 1928年、『著作集』1に再録)
 - 23) 阿部隆一「奥床しき書物の数々」『慶応義塾大学新聞』149 1955年7月5日号
 - 24) 室谷鐵腸編『濱方記録』序文 改造社 1926年
 - 25) 幸田成友「鴻池屋伊助」『著作集』6所収
 - 26) 幸田成友『大塩平八郎』189~190頁 東亞堂、1910年(『著作集』5に再録)
 - 27) 幸田成友「江戸と大阪」富士房、1934年(『著作集』2に再録)
 - 28) 幸田成友「初代鹿田静七氏と書籍月報」(『著作集』7所収)
 - 29) 慶応義塾大学所蔵幸田文庫にも濱氏旧蔵書が散見された。
 - 30) 幸田成友『日本経済史研究』大岡山書店、1928年
 - 31) 服部一馬「『日本経済史』の成立と展開」(増田四郎ほか編『日本における社会経済史学の発達(社会経済史体系10)』弘文館、1960年所収)
 - 32) 南和男「旧幕府引継書目録」『江戸の社会構造』塙書房、1969年
 - 33) 増田四郎「幸田成友」(永原慶二、鹿野政直編著『日本の歴史家』日本評論社1976年所収)
 - 34) 東京大学史料編纂所編『諸問屋再興調(大日本近世史料)』東京大学出版会、1956年

-1980年

- 35) 東京大学史料編纂所編『市中取締類集（大日本近世史料）』例言 東京大學出會、1959年
- 36) 前掲35) 書
- 37) 幸田成友「質屋について」『商学研究』4-1 1924年（『日本經濟史研究』大岡山書店 1928年、『著作集』1に再録）
- 38) 前掲32) 書
- 39) 幸田成友「御觸書寛保集成」『社会經濟史学』4-10 1935年（『著作集』7に再録）
- 40) 幸田成友「石井博士に答ふ」『社会經濟史学』4-12 1935年（『著作集』2に再録）
- 41) 北原進「江戸の札差」吉川弘文館、1985年
- 42) 幸田成友「札差」『三田学会雑誌』9-8・9 1915年（『日本經濟史研究』大岡山書店 1928年、『著作集』1に再録）
- 43) 幸田成友「札差事略」『一橋新聞』61 1927年11月7日号
- 44) 幸田成友「札差事略と其著者」『商学研究』8-2 1928年（『日本經濟史研究』大岡山書店 1928年、『著作集』1に再録）
- 45) 一橋大学札差事略刊行会校刊『札差事略』創文社、1965-1967年
- 46) 金井円「歴史学—ルートヴィヒ・リースをめぐって」（『お雇い外国人17人文科学』所収 鹿島出版社、1976年）、東京大学百年史編集委員会編『東京大學百年史 部局史1』第二編文学部 東京大学出版会、1986年
- 47) 林基「三田の国史学と幸田成友」『史学』60-2・3 1991年
- 48) 内田銀蔵「經濟史の研究に就きて」『經濟叢書』1-3 1901年（『日本經濟史の研究』同文館、1921年に再録）
- 49) 京都帝国大学教授であった内田が、大阪市史編纂室解散後の幸田を講師として招聘したことに、幸田は感謝している。（『内田銀蔵博士』『著作集』7所収）
- 50) 『一橋大学学問史』一橋大学学問史刊行委員会編 1986年 1030頁

付記：本稿は、平成14年度一橋大学公開展示企画展「武家社会と江戸・大坂—幸田成友とその史料」の成果の一部に加筆したものです。ともに展示の準備にあたった金沢幾子氏、小野亘氏、吉田恵理氏、ならびに、監修いただいた池亨先生に感謝申し上げます。